さきに愛

第一部 一結

さきに愛ありて

第一部　―結婚のために―

藤原審爾

新潮社版

さきに愛ありて
第一部　結婚のために
昭和四十八年十二月十日　印刷
昭和四十八年十二月十五日　発行
定価六五〇円
著者　藤原審爾
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)二六〇一一一一
振替東京八〇八番
（乱丁・落丁のものは、本社またはお買上げの書店にてお取替えいたします。）

印刷・二光印刷株式会社　製本・新宿加藤製本
© Shinji Fujiwara. Printed in Japan. 1973

目次

いちどだけの春　五
世の波　三一
みじかい年　四六
ぎざぎざの街　八四
沈まぬ生活　一三
淀あり瀬あり　一六九
ゆるやかな高潮　二〇九

装幀 田浦俊夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

さきに愛ありて

第一部　結婚のために

いちどだけの春

雨戸のしまったうす暗い部屋の中で、霧子は起きあがった。となりの寝床では、母親のまきがまだかるい鼾をかいている。お河童頭の霧子は、横の窓際にある学習机の上の時計をみた。もう九時半である。

霧子が春休みなので、このところ霧子の家は朝がおそい。霧子は母親のまきを起そうかと思ったが、すぐに思いなおした。どうせ、休みのときくらいゆっくり寝かせておくれよと、めんどくさそうに言うにちがいない。水商売をやっていたまきは、寝起きがわるいのである。

霧子は自分で朝御飯をつくる気で、黄色いパジャマを茶色のセーターとグレーのスカートに着がえた。四十すぎのまきは、派手なあかいしぼりの蒲団の中で、ななめになって寝ており、片足が仄白く腿のあたりまでのぞいていた。霧子はあかい蒲団をひっぱってまきのむっちりした足をかくし、それから部屋を出た。

襖の外の居間には、窓から朝陽がさしこんでいて、まぶしいほど明るくてあたたかい。居間は六帖で、真ん中にホームコタツがおいてある。コタツの台の上には、湯呑や急須や駄菓子の少しのこった皿が、昨夜のまま散らかっている。コタツのまわりには、斜めになった座布団や新聞雑

誌が投げだしてあって、足の踏み場もないようなありさまだった。二年前に亡くなった父親は、綺麗好きで、家の中が散らかっていると、すぐ大声をあげて母親を叱りつけた。

「しまりのない頭の子を育てたいのか」

父親は、すっきりした感じの子供に育てるためには、きちんと整頓された家庭が必要だという考えを、始終口姦ましく言っていた。それでまきは、

「お父さんがもう帰ってくるわよ、掃除をしなきゃあ」

といって掃除やかたづけをしたものだが、父親が亡くなると、いつの間にか散らかしっぱなしの家になった。姉の陽子と月子は、もともと母親似で、たちまち母親を真似て、散らかしっぱなし、やりっぱなしの、どことなくだらしない娘にかわってしまった。

霧子だけが父親似で、父親とおなじように綺麗好きで、散らかっているのがきらいだった。

霧子は、すぐ散らかった居間をかたづけはじめた。来月から高校生になる霧子は、眉が濃く目の光りが強く、顔の輪郭が南国の娘のようにはっきりしていて、おさない美少年のように可愛い。しかし姉たちのおさがりの地味なセーターやスカートや、かたづけに馴れていて段取りも手つきもよいせいで、ずっと大人っぽくみえた。しかしほんとうは、はやく実を結びたいために、いっしょうけんめい陽にむかっている花の蕾のように、霧子のすべてはひたすら成長へそそがれており、そういうかたづけをらくにこなせるほど、霧子は育っていなかった。

やがて居間をかたづけ、顔を洗った時分には、朝御飯をつくってたべる気がなくなり、霧子はふらっと眩しい表へ出ていった。強く口を結んだ怒ったような顔つきで。

万城霧子の家は、瀬戸内海にむかってせりだした山の中腹の小さい台地にある。
その緑の山の林にかこまれた台地に、十ばかりの家が横にならんで建っている。中でいちばん大きな白い洋館の病院のとなりの、小ぢんまりした二階家が、霧子たちの家だった。
眩しい表に出た霧子は、柵もない地つづきの病院の百坪くらいの裏庭を、斜めによこぎって、石畳みの坂道へ飛び下り、くねくね曲りながら海へむかってくだっていく坂道を、ぶらぶらおりていった。
病院の下の斜面の林がきれたところに、豊かに水をたたえた川がある。その川ぞいの小道へ曲って霧子は、うつむきながら歩きはじめた。五間あまりのわりとゆたかに水をたたえた川は、しばらく下ったところで、山の岬のせりだした山腹へぶつかり、急にむきをかえて、海へむかって流れていっている。
川が急にむきをかえたところには、山腹が大きくえぐられ、そこに淵が出来ている。淵のてまえの平地のところに、浄雲寺という古い寺がある。小さいお寺なのだが、いつもきちんと掃除がしてあり、庭には箒木の目がついている。父が生きていた頃、霧子はよく父に連れられて、ここに散歩にきており、庭の箒木の目が好きだった。庭にくっきりのこっている箒木のあとを眺めていると、そのうち庭が海のように広く大きく思われてくる。それにつれて胸が大きく広くなり、次第に自分が大人になった気がしてくる。そして名状しがたいよろこびが胸をふるわせてくるのが、霧子は好きだった。
浄雲寺の門の前まできて、霧子は立ちどまり、われにかえったように顔をあげた。
古びた門の柱に、故藤川儀一告別式場という長い立札がかかっており、門内の庭のむこうの本堂で、その告別式のためいそがしそうに働く人たちが見えた。それで霧子は、川ぞいの小道のほ

うをそのまま進み、横門の前の川ぶちにある、雨ざらしの細長い腰かけへ腰をおろした。
目の前を川はまっすぐにのび、両岸の家々がたちこんでくる間を、こころもち右へまわりながら、やがて海と一つになっている。その輝く白っぽい海から、時折強い風がわたってきて、あたりの樹々の梢をざわめかして吹きぬけていっていた。
霧子は、そこで地面を蹴ったり、むこう岸の公園の中で、バレーボールをやっているのを眺めたりしながら、そのうちしいんと考えこみだした。少し怒ったような、それでいて少しかなしげな顔で。

霧子の父親は、歯科医で、霧子の祖父と一緒に開業していたのだが、祖父が亡くなるとたちまち人をやとって歯科医院のほうをまかせ、自分は小さい出版社へ勤めだした。戦争がはじまり出版社がつぶれると、この市へ疎開してきて、駅裏でまた歯科医院をはじめた。無口で気むずかしくて、まきを叱ってばかりいたが、霧子たち子どもには優しい父親だった。
父親が二年前の二十八年の夏、交通事故で亡くなると、母親は駅裏の家を売り、いまの家と街なかのバーを買った。
「おまえたちをちゃんと学校へいかせるためには、こうするよりしかたがないんだよ」
絶対にお店へきちゃいけないなどと言ったが、半分は自分のための口実だった。たちまちまきは、ぷんぷんバーの匂いのする自堕落な女になった。酔っぱらって帰ってくる日が多くなり、そのうえ店の客を連れてもどってきて、夜っぴいて酒をのんだりしだした。それでも、
「ああしなきゃあ、お店はやってかれないんだよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

と言いはった。それならあたしたちもどこかへ働きにいくと陽子と月子が言っても、まきは、それを承知しなかった。このあたりでは、いいとこの娘は働きにいったりしない、いいとこへお嫁にいけないと言うのである。

今年の正月、短大へいっている月子が、友達の家へ遊びにいって、バーの娘だと軽蔑されたと泣いて帰ってきて、まきにかみつくように言った。

「母さんはなにかというとあたしたちのためだ、いいとこへお嫁にいけなくなるっていうけど、そんなことであたしたちをだませると思ってるの。母さんは、あたしたちをだしにしてるだけじゃないのよ。三人の子どもをわたしはちゃんと立派に育てていると思いたいのよ。そのために、いやな思いをがまんして、客の言うことを聞いているんだと思いたいのよ。だからあたしたちが働きにいって、お金をかせいできたら困るのよ。母さんは男相手の商売が好きなのよ。あたしたちの将来を、ほんとうはめちゃめちゃにしてるのよ」

その時、まきは泣いて怒った。おまえたちは、母さんを頼れるけど母さんには頼る人がいないんだよ。どんなに母さんが淋しくてたまらないかを、おまえたちはわかってくれない、わかろうとしないじゃないか。あんたたち三人が、お嫁にいったら、あたしはひとりぼっちになるんだよ。母さんは崖へむかって歩いていって、ただ落ちてしまうなんていやよ。もっとほかのことをしたいんだ、しちゃいけないのかい。そりゃあんたたちだっていまはだよ、母さんをほっとく気なんかないだろうけど、お嫁にいったら、そうはいかないんだ。母さんだって、おまえたちの厄介者になって、おまえたちに肩身のせまい思いをさせたかァないよ。

親娘で結局泣きあい、それでまきは三月はじめに店をやめて、店は人に貸してしまった。しかし親娘は、そのあと将来のことを考え合ったりする仲にはならず、ただむやみに親しくなって、

おしゃべりばかりするようになっただけだった。そしてまきも姉たちも、競争しているふうにどんどん自堕落でしまらない女になっていった。

そうした中で、霧子はひとりとりのこされて、そんな雰囲気にとけこめなかった。そんなふうな自堕落な生活がきらいなばかりでなくて、この家にひっこしする前から、霧子はなんとなくまきを許しがたく思いはじめていた。最初のショックは、まきが父の持ち物をあっさり売りはらったときだった。

駅裏の家では、姉たちは改築した表の診療室の二階、霧子は奥の古い母屋の二階に部屋をもらっていた。その二階の隣りの部屋が父の書斎で、部屋の三方の壁に、ぎっしり本が並んでいた。中学一年の霧子は、その書斎の掃除係を買って出て、本棚の掃除を二日に一度くらいのわりでやっていた。古い家なので二日もたつと、うっすら白っぽいほこりが、本棚にも机の上にもたまるのである。いったいほこりはどこからくるのか、それが不思議で霧子は何日も研究してみたりした。

そんな部屋の本を、父が亡くなると間もなく、まきは古本屋と古道具屋をよんできて、のこらず売り払ってしまったのだった。本ばかりでなく器械も服も売り払ってしまったまきには、夫とのあたたかい記憶をぬぐいとって、新しい人生を子たちのために歩もうという気持ちよりも、ただなんとなく父から完全に解放されたいという気持ちのほうが、よほど強くみえて、そのため霧子はショックを受けたのだった。そして、そのときから霧子は父がのり移ったように、まきの自堕落なところが目につきだし、次第にまきを許せなくなっていった。

やがていまの家へ移り、これまでとちがい、まきと二人で一つ部屋に住むようになり、まきが酔っぱらって帰りはじめると、霧子は家を出ることをいつとはなく考えるようになった。どんな

に辛い仕事だろうと、夜中に酔っぱらいの男がきて騒いだり、酒くさい家の中で朝目をさましたりするより、ずっとましな気がするのだった。
むろんそういう願望のような気持ちで、すぐにそれを実行したりは出来はしない。少なくとも中学を出ていなければ、使ってくれるところもないだろう。霧子は、中学を出るまでは我慢して家に居ようと、なんども自分に言い聞かせた。
その中学を終えたばかりに、いまや霧子は自分のためにその答を出さなければならなくなっていた。
それが霧子の心と顔を、少しおこったような、それでいてどことなくかなしげなかげのある顔にしているのだった。

ふいに、足もとのほうから、
「ここは釣れないのかい」
と声が浮きあがるように聞えてきて、霧子はうろたえて相手をさがした。斜め下の淵の岸辺の青草のところに、しゃれた煉瓦色のハーフコートにピケ帽をかぶった若い男が、長い細い竿をもって、流れへ糸をたれていた。
「よく釣れるわよ、でもまだすこし早いかしら」
「餌はとられるんだがなあ」
竿をあげて、餌をつけ、若い男はまた上流のほうへそれを投げこんだ。
赤と白との斑の丸い小さな浮子が、すうっと流れてくる。

淵の底には、押し流されてきた大きな石がたまっていて、底の速い流れがその石にあたってよじれている。そこへ餌が近づくとまきこまれて、浮子がぐうっと沈む。
それとハヤが餌にくいついたのとのけじめが、若い男にはわからない。速い流れにまきこまれたときに竿をあげ、ハヤの当たりのときはほっている。
父と一緒によく釣りにいっていた霧子は、
「ここじゃ、その浮子では駄目よ」
と岸辺へ下りていった。
「どうしてだい」
「小さすぎるのよ、おじさん」
「おじさん？　おじさんはひどいよ」
それで霧子は、はじめて若い男の顔を仰いだ。男はピケ帽の下で、二十歳すぎの色の白い笑顔を、霧子へじっとむけていた。やわらかく優しい目ときれいな歯が、すぐに霧子の目にとまった。
「あら、インターンの志摩先生ね」
志摩がびっくりした顔になった。
「なあんだ、君、病院にいるのかい」
「そうじゃないわ、ちょっとかして」
霧子は竿をとって、餌をしらべ、
「よく見てよ」
とそれを上流のほうへ投げこんだ。
「それじゃどうしてぼくのことを知ってるんだ」

「姉さんたちが話してたからよ。ほら、これは、ハヤとちがうのよ、底の速い流れにひっぱりこまれたの。まだ水がつめたいから、ハヤは元気がないのよ、あたりが弱いから、よく見てないと」
ぴくっと浮子が揺れるのと同時に、霧子がすっと竿をあげた。
宙の春陽の中で、銀色のハヤが輝いた。躍っている。
「うまいもんだね」
「わかったでしょ」
「むずかしいな」
魚籠へ霧子がハヤを入れ、それを川へ青草で吊しているうちに、志摩は餌をつけ、それを投げこみ、たちまち一匹つりあげた。
「うん、わかった。しかし、浮子が小さすぎると言ったら、だけど大きくするとよけいに当りがわからなくなるんじゃないか」
「大きいから重いとはかぎらないわ」
「ああそうか」
「麦藁がいいのよ、あれならよくわかるわよ」
志摩はまた釣りあげた。それをすぐ霧子がとって魚籠へ入れた。それもハヤをはずす前に、霧子は餌のさしを志摩に渡す。その手際と間合がよくて、まるで熟練した秀れた看護婦と一緒に手術をしているような気持ちに、志摩はさせられた。
「君の姉さんって看護婦さんかい」
「ちがうわ、どうして？」
「いやなんでもないんだ」

「姉さんがなに言ってたか気になる？」
「どうしてぼくのこと知ってるのかな」
「だってあたしたち、隣りだもん」
「ああそうか、君の姉さんって万城さんなのか」
「そうよ」
「なんて言ってた？」
「気取ってるけど可愛いって」
「うへッ」
「打診するとき、手がふるえていたって言ってたわ」
「そうかなあ」
　そういう間に、志摩はハヤのいるポイントをつかみ、どんどん釣りあげた。それを霧子は、手ぎわよく魚籠にとってやる。ぴったり一つに気が合い、すべてが順調になった。
「それから、医者より俳優にむいてるって言ってたわ」
「そうかなあ」
「あらすなおねえ」
「こら生意気言うな」
　志摩は笑いながら優しい目ざしでちらりと霧子をみて、左の人さし指でかるく霧子のおでこを押した。別に他意なく親しさの表現でしかなかったのだが、瞬間、霧子は押された額のそこから名状しがたい不思議な戦慄が、全身へ走った。それが霧子をしびらせ、霧子を変えた。凝っと立ちすくみ、白い充実そのもののようになった。そして束の間さっと身を翻えして霧子は駆けだし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.